海棠花

かいどうのはな

子規漢詩と漱石

飯田利行著

海棠花

かいどうのはな

子規漢詩と漱石

飯田利行著

柏書房

飯田利行(いいだ・りぎょう)

1911年群馬県生まれ。
1937年東京文理科大学漢文学科卒。音韻学。
駒沢大学専任講師，京都東方文化研究所助手をへて，駒沢大学教授，専修大学教授，二松学舎大学講師を歴任。
『漱石詩集譯』(国書刊行会)，『定本湛然居士文集譯』(国書刊行会)，『定本良寛詩集譯』(名著出版)，『新撰禅林墨場必携』(柏書房)，『日本に残存せる中国近世音の研究』(名著出版覆刊) 他多数。

書名　海棠花(かいどうのはな)　——子規漢詩と漱石——

1991年10月12日　第1刷発行　　定価2,400円
(本体2,330円)

著　者　飯　田　利　行

発行者　渡　辺　周　一

発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113)
電話03 (3947) 8251 (代表)

製　版　ローヤル企画

印　刷　不二精版印刷

製　本　協栄製本

はしがき

一九一五年、フランスのロマン・ローランが、東大生の成瀬正一に寄せた書翰に「欧州の言語や思想に通暁するために、絶えず努力なさい。併し同時に亜細亜に於ける、あらゆる偉大なる思想をも凡て包蔵なさい」と告げている。これよりのち、イギリスのトインビーが、日本には、西洋語ならびに西洋文学の研究者の多いことと、それらの学者の多くが、日本及びアジアの文化に対して理解が低いことに喫驚したという。私は、両人の指摘に対し、二の句が継げない。これは近代日本文学の巨匠子規、漱石の研究者に対しても当てはまる箴言だからである。

音韻学を軸にした私の文学研究の結論を端的にいえば、作者の真実は、詩によって最も良くそれを明かしうる。しかもその詩も表象された文字の外、つまり文字と文字、語と語、句と句、行間と行間との空白の間に醸されている作者の息吹、想念を通してである。裏を返せば、巨細に語り尽くした散文では、作者の真実は理解しにくいということになる。こうした表象の虚しさに対し、萩原朔太郎は、『詩の原理』で「詩は以心伝心」

であると言い切る。

ローラン、トインビーの指摘はさておき、これまでの子規や漱石の文学愛好者、研究者は、なぜ真実に迫っている詩を訓むことを先にしなかったのかと反問したい。真実の追究という問題を離れても、子規、漱石の詩には、和漢洋にわたる蘊奥が凝縮されているので読めば読むほどに妙味が湧いてくるはずである。

漱石の詩は、これまで一、二の人によって訓まれてきた。が、子規の詩は、僅かに愛媛大学教授渡部勝己によって『子規全集』第八巻（講談社）に、書き下し文と解題があるだけで、解釈、鑑賞、評言まではなされていない。つまり子規詩の研究書は皆無であったということである。私は多年、漱石詩に魅せられて愛誦し、『漱石詩集訳』を世に送った。しかしその中に真実をつきとめにくいものが、なお存在していた。もしかしたならば、親友子規の詩なり、漱石宛の書翰の中に、その疑問を解く緒口が見つかるかもしれないという望みが、本稿執筆の動機となった。そして子規の棲む大樹の詩に斧を入れるうちに、漱石が詩に託した音韻のひびきを通しその悲願をも聴き取ることができ「雲霽れて山骨露わる」の感を深めることができた。

本書に採用した両者の詩文は、ともに貴重な青春記録をなしている。特に「岐蘇詩」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のごときは、二十五歳にして文質ともに彬々たる大人物の風貌さえ窺いうる。本書は世の常の若者が直面する事象を子規、漱石はどのように煩悶し、かつ超克したかをも知りうる絶好の読物であろう。

子規詩の初期は、純粋性を秘めた青雲の志が随所に溢れ出ている。そして晩年、特に二十八年以降の詩に、ただならぬけはいを読み取った人はいる。たしかに二十四年の「岐蘇詩」に比べたならば、子規晩年の詩は、構成措辞上、香り薄しの感はある。だが、いよいよ死が切迫してきたときに詠んだ禅僧の遺偈にも匹敵する最期の詩は、人間の深さと輝きがいや増して圧巻である。

一方、漱石詩の初期は、詩格を気にしつつ自己の表現に腐心した青年内気の詩であり、後半の詩の大部分は、大正五年に詠まれた。しかもその詩は、『明暗』を書き続けるための命綱ともいうべき性質のものであった。それらの詩は、不羈でしかも真率な自己の表現であり、生活と乖離した天保時代の老臭閑適の詩とは似ても似つかぬものばかりであった。つまり子規、漱石の本領は、詩格を重んじつつも、詩情は天馬空を行く気概があり、生活に即したものであった。したがって閑適をこととする評者の埒外に在ったといえよう。

由来、漢字漢文の文化は、西紀前から生活に密着して今日まで生き続けてきた。しかるにこの文化遺産は、ハイテク時代の尖端を切るべき使命を背負わされることとなる。私は、子規、漱石を通じてその生命の綱が詩文にあることを痛感した。「漢文のすすめ」にその考えを述べたが、こうした時代の到来を予測したかのごとき子規、漱石の詩業を偉としたい。

子規、漱石は、三千年来伝承されてきた最高の文学ジャンルの〝詩〟を通して思いの丈を表象し、しかも詩文学の永生を実証した。魯の孔子は、いみじくも〝言の文なきは、行わるるも遠からず〟と述べているが、これは〝文ある言〟は永く伝わるとの意にほかならない。本書により、子規詩の素晴しさを充分に味読していただきたい。

漱石は、花ならば海棠かと『草枕』に三箇所、『永日小品』の「行列」、評論「写生文」にいう。雨中の梨花には、ただ憐れな感がするが、月下の海棠には、愛らしい気持がすると。これに応えるかのように子規は、女ならば阿艶のごときが海棠かと「題漱石書屋壁上所貼阿艶小照」に、さらに「春雨」「山東会館」「墨江詩」に海棠の花を佳人に擬している。このように海棠を通して両者の「志」が期せずして結ばれていたので敢えて書名とした。

子規は、〝他人の為し能はざる所を為すは人の快とする所なり〟（明治二十六年「春色秋光」）といった。本書を出版するにあたり遠藤茂編集部長は、他（ひと）の為し能わざるコメントを一読者の立場で惜しまず示して下さった。また編集の山田剛彦君は、挿図から校正、造本まで細心の配慮をめぐらしてくれた。多謝してやまない。

平成三年八月

東京四谷容峰堂　飯田利行 識

目次

はじめに

I 子規の詩と真実 ―― 9

(1) 子規文学の萌芽 10
(2) 初作詩より連作詩まで 13
(3) 子規が漢詩離れをしたという説 24
(4) 子規の作詩論 38
(5) 子規詩と漱石詩 44
(6) 子規詩と良寛詩 54

II 子規詩集と漱石 ―― 61

(1) 夏目漱石に寄す 62
(2) 『木屑録』評 66
(3) 水戸紀行詩 81

(4) 三井寺に僑居す　86
(5) 三井寺に寓居し　夏目漱石に寄す　107
(6) 詩を論じて佳境に入る　112
(7) 阿艶の小照に題す　115
(8) 岐蘇雑詩十五首　122
(9) 春雨　178
(10) 痾を養いて郷里松山に在り　182
(11) 軍に従いて病を得　やや癒えて京に帰る　187
(12) 十二月三十一日夏目漱石来る　191
(13) 夏目漱石の伊予に之くを送る　195
(14) 病中　漱石の柬到る　202
(15) 漱石　205
漢文のすすめ―むすびに代えて―　210

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

子規の詩と真実

(1) 子規文学の萌芽

子規は、明治三十五年四月『獺祭書屋俳句帖抄』上巻の「自序」に、わが文学の萌芽ともいうべき一文を草している。

「自分が俳句を始めたのはいつからといふ事もない。又誰れに習つたといふ事もない。平仄を並べて五七言絶句を作る事はまだ日本外史を素読してゐる位の時代から既に教へられた。少し年をとつてから文法の合はぬ短歌を作つて先生に見て貰つた事もある。俳句は其頃少しも見た事もなければ作つた事もなかつたが、それでも普通の俗人が花見に行くとか何か一句ひねくるやうなわけで、自分も何とはなしに十七文字を連ねて見たのは明治十八年の事であつたらう。併しもとより先生があるではなし友達があるではなし、自分の楽にやつてをるやうなものゝまだ趣味も何もわからないのであるから本気になつてやつてをるわけでもない」

これよりさき明治十七年、十八歳の子規は「四国　沐猴冠者」という筆名のもとに「夢中の詩」と題し『筆まか勢』第一編に示している。

「二月十三日　風邪劇シク声全ク出デズ　夜半夢驚クノ際　雪ノ窓ヲ打ツヲ聞ク　夢カ幻カ一聯ヲ得タリ

制服制帽姿の子規（第一高等中学校予科、明治20年３月）

打窓聲小軟於雨　窓うつ声小かにして　雨よりも軟し、
鋪地色明白似霜　地に鋪く色明るく　霜よりも白し。

翌暁眠覚メテ後　猶模糊心胸ニアリ」

このように、いわゆる子規文学発生以前に早くも漢詩に写生文の妙趣を発揮しはじめている。漢詩による叙景の妙趣は、南画の開祖であり、琴曲の名手であった詩仏こと唐の王維の詩にみることができる。芭蕉の山寺こと立石寺における「閑さや岩にしみ入る蟬の声」や、名句「古池や蛙飛びこむ水の音」も次に掲げる王維の詩「鹿柴」を下敷きにしている。

空山不見人　空山に　人を見ず、
但聞人語響　ただ人語の響を聞くのみ。
返景入深林　返景　深林に入り、
復照青苔上　また照らす　青苔の上を。

これは音感をモチーフにした情景描写の圧巻ともいうべきもの。子規の詩にも、先人が打ち立てて

いた世界の一端をうかがうことができる。

次に上記一聯の「鋪地色明白似霜」の措辞についてふれてみる。「似」を比較の助字に使っていることである。比較・出自の助字は、通常においては、「青出於藍而青於藍」（「青は藍より出でて藍よりも青し」『荀子』勧学篇）などと「於」が使われている。しかるに十八歳の子規は、「似」という高級度の助字を早くも使いこなした。「似」を比較の助字に使うことについては、『大漢和辞典』（大修館書店）にも出ていない。「蛇は寸にして人を呑む」というが、子規も端倪すべからざる片鱗をすでに覗かせていたわけである。

(2) 初作詩より連作詩まで

子規は、明治十一年、十二歳のとき第一作の漢詩を詠む。

聞子規　余作詩以此爲始　子規を聞く。余の作詩これを以て始となす。

一聲孤月下　一声　孤月の下、

啼血不堪聞　血に啼き　聞くに堪えず。

半夜空欹枕　半夜　空しく枕に欹(そばだ)てば、
古郷萬里雲　古郷は　万里の雲。

空には一輪の月、地には子規の声。血を吐くような切ないその啼き声は、哀(かな)しく響き聞くにたえない。真夜中に、枕から耳を外してそばだてて、じっと聴き入れば、ふと万里も遙かなる故郷のことがしのばれてきた。

聡明な少年子規は、血を吐く病人となる己を予見しているかのような讖詩(しんし)を詠む。

また明治十三年には、

詠秋蘭　秋蘭を詠ず。

帶露千莖葉　露を帯ぶ　千茎の葉、
含風數箇花　風を含む　数箇の花。
看來無俗態　看来れば　俗態無し、
與汝了生涯　汝とともに　生涯を了(お)えん。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com